

令和7年8月12日

豊田市議会議長 北川 敏崇 様

企画総務委員長  
深津 秀 仁



委員派遣実施報告書

本委員会は、下記のとおり委員派遣を実施しましたので、豊田市議会委員会条例第37条第1項の規定により報告書を提出します。

記

- 1 派遣期間 令和7年7月22日（火）から同月24日（木）まで
  
- 2 派遣場所 22日（火）…神奈川県藤沢市／藤沢SST  
及び内容 藤沢サスティナブルスマートタウン  
23日（水）…東京都中央区／  
水素パイプラインと燃料電池による地域内  
エネルギー活用  
24日（木）…栃木県宇都宮市／  
宇都宮LRT
  
- 3 派遣委員 委員長 深津 秀仁  
副委員長 石川 要一  
委員 鈴木 章 榎屋小百合 塩谷 雅樹 岩田 淳  
福岡 靖純 中島 竜二 武田 一夫
  
- 4 報告書 視察報告書のとおり
  
- 5 随行者 藤野 晃浩 瀬織 教恵

## 視察報告書【1】

委員会名	企画総務委員会	委員名	深津 秀仁
視察日時	令和7年7月22日（火）午後1時00分～午後3時00分		
視察先・概要	神奈川県藤沢市 人口：443,682人(令和7.7.1現在) 面積：69.56km <sup>2</sup>		
視察内容	藤沢サスティナブルスマートタウン		
選定理由	Fujisawa S S Tはパナソニックの工場跡地を活用して、2014年にまちびらきをしたスマートタウンで、「生きるエネルギーがうまれる街」をコンセプトに、住人・企業・自治体・大学が一体となって、住人の「くらし起点」で持続的に成長する先進的なまちづくりが進められてきた。これまでに実証実験やマーケティング調査など100件超の取組みから10件の新たなビジネスが生まれている。2014年から街の構想を改定するとともに、推進体制が改組され、ソフト面のさらなる進化に取り組んでおり、本市の未来都市推進の参考になるため。		
豊田市の現状と課題	本市は、2018年に内閣府からSDGs未来都市に選定され、「豊田市つながる社会実証推進協議会」を中心に市民、企業、大学、金融機関など様々なメンバーが分野を超えてつながり、本市をフィールドとして様々な実証を展開し、SDGs達成や持続可能なまちづくりに取り組んでいる。しかしながら、各施策がそれぞれ独立して取り組まれており、市民の暮らしにどう生かされていくのかという発想や、実証を実装としてビジネス展開していくという視点が弱いことが課題と捉えている。		
視察概要	<p>周辺地域の都市構造の強化に貢献する公共施設の整備、多様な機能を持つ土地利用への転換を誘導する宅地の整備を行う事により、環境負荷の少ない持続可能な市街地の形成に寄与することを目的に施行したものの。</p> <p>技術先行のインフラ起点ではなく、住人ひとりひとりの「くらし起点」のまちづくりを推進し、『生きるエネルギーがうまれる街。』を確立している。</p>		
評価と その由	<ul style="list-style-type: none"> <li>・民間が運営しているだけに常にバージョンアップし実験を繰り返しながら運営している。また、明確なビジョンを持って社会潮流や、時代の変化を先取りして、サスティナブルに成長し続けるためにアップデートしている。</li> <li>・多くの民間企業や、団体がFujisawa S S Tコンソーシアム参加して理想の街づくりを行っている。見守りカメラが47台設置され、自宅でカメラの画像を確認できる点はセキュリティ面において万全である。</li> <li>・技術中心に進化してきたスマートタウンは、最初にインフラを構築し、次に家や施設の空間設計を行い、最後に住人サービスを考えている。</li> <li>・民間活力がふんだんに入っている点（31団体）。まちづくりは、長期的視点が大切であり、転勤などで空き家が発生してもすぐに新たな住人がみつかるようで、住み替え誘導に対するまちづくりができていた。</li> <li>・100年続くまちを目指しているが、10年経過した時点で当初の目標を修正している点を評価する。例えば、当初マンション建設予定であった場所を高齢者向け住宅に変更しシニアレジデンスなどの高齢者施設とするなど、高齢化社会を見据えた施策に転換している。</li> </ul>		
本市に反映 できること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本市にあっても、民間の力を借り大胆にこれから行われる事業に取り入れていく事が重要であると考えます。</li> <li>また、これから計画される区画整理事業等に、この様な方式を取り入れ、未来型のまちづくりをしていく必要があると考えます。</li> <li>・豊田市ではエコフルタウンは実証実験で終わったが、Fujisawa S S Tのように実装（ビジネス化）していく点が必要と感じた。</li> </ul>		

その他  
(意見・課題などあれば)

・戸建て住宅の価格8千万円～、駐車スペースは1台という条件で、豊田市においてそのままの導入は現状難しいといえる。  
・壁の色、駐車場に屋根をつけてはいけないなど、街並みに対しての規制が多い。



## 視察報告書【2】

委員会名	企画総務委員会	委員名	深津 秀仁
視察日時	令和7年7月23日（水）午後1時30～午後3時00分		
視察先・概要	東京都中央区 人口：189,025人(令和7.7.1現在) 面積：10.21km <sup>2</sup>		
視察内容	水素パイプラインと燃料電池による地域内エネルギー活用		
選定理由	<p>東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会後の選手村地区では、2018年に、東京都と東京ガス㈱など民間6社が基本協定を締結し、水素をまちのエネルギーとして先導的に導入し、環境先進都市のモデルとなるまちの実現に向けた取組を推進している。2014年には、水素ステーションが開所し、東京 BRT や都営バスなど大型の燃料電池車両への水素供給体制が整うとともに、国内初となるパイプラインによる街区への水素供給が開始されており、街区単位でのカーボンニュートラル社会の実現に取り組んでいるため。</p>		
豊田市の現状と課題	<p>本市では、2016年に「豊田市つながる社会実証推進協議会」が設立され、企業、大学、行政、金融機関及び地域商工団体等が、業種を越えてフラットな立場で連携し、地域課題の解決に資する技術の開発・実証に取り組まれている、しかしながら、市民の暮らしの中でどう生かされていくのかという発想や、実証を実装としてビジネス展開していくという視点が弱いことが課題と捉えている。</p>		
視察概要	<p>東京 2020 大会の選手村跡地において、水素をまちのエネルギーとして先導的に導入するなど、環境先進都市のモデルとなるまちの実現に向けた取組を推進している。</p> <p>C02フリー水素普及を見据えた、低炭素社会の先駆けとなる取組。パイプラインによる街区への水素供給としては、実用段階では国内初で、東京晴海水素ステーションが開所し、東京 BRT や都営バスなど大型の燃料電池車両への水素供給体制が整うとともに、令和6年3月29日より実用段階では国内初となるパイプラインによる街区への水素供給が開始された。</p>		
評価とその理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会の選手村の整備と大会後の新たなまちづくりを進め、大会後は、都心から近く海に開かれた立地特性を生かして、大会のレガシーとなるまちづくりを進めている。</li> <li>・選手村を分譲マンションへ転用していく東京都の取組は、日本のモデルケースとして興味深く感じた。</li> <li>・水素をまちのエネルギーとして先導的に導入するなど、環境先進都市のモデルとなるまちを目指した取組を推進している。</li> <li>・東京都では水素に特化した組織編成を産業労働局として進めている点。</li> <li>・水素パイプラインは、マンション共用部や学校での使用となっている。水素を普及させようという強い思いや住民への意識を感じた。</li> </ul>		
本市に反映できること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本市においても、C02の削減目標を設けており、その目標達成のためにも、水素をエネルギーとした取組は必要と考えるが、水素ステーションをはじめ、本市独自で設備開発をしていくには課題が多いと考える。</li> <li>・民間のノウハウなどを活かしていくことや、研究に投資することなど市として選考投資する価値はあると考える。</li> </ul> <p>まずは実証を行い、水素の製造単価を抑えるようにしていく事が重要である。</p>		

その他  
(意見・課題などあれば)

- ・水素のコストが現在の3分の1くらいにならないと、普及が進んでいかないのか、豊田市に普及していくのか。今後も注視していきたい。
- ・水素発電は、まだ価格が高く共有部分でしか使えていない点。
- ・選手村の跡地の住居が住む場所ではなく、外国人の投機対象となっており法整備が遅れている点が残念と感じた。
- ・太陽光・水素などエネルギー問題がどの方向にいくのか。国としても研究開発が必要と感じた。



### 視察報告書【3】

委員会名	企画総務委員会	委員名	深津 秀仁
視察日時	令和7年7月24日（木）午前9時00分～午前11時30分 午後1時00分～午後2時00分		
視察先・概要	栃木県宇都宮市 人口：511,957人（令和7.1.1現在） 面積：416.85㎢		
視察内容	①宇都宮LRT ②オープンスクエア		
選定理由	宇都宮市は、2030年ごろを見据え、子どもから高齢者まで、誰もが豊かで便利に安心して暮らすことができ、夢や希望がかなうまち「スーパースマートシティ」を実現するため、各地域のコンパクトな拠点が公共交通でつながることで、持続的に発展できる「ネットワークコンパクトシティ(NCC)」の形成に取り組んでいる。その核となるのがLRTライトラインであり、本市が目指す拠点連携型都市の参考とすることができるため。		
豊田市の現状と課題	本市が第9次総合計画で目指している将来都市構造は、都市部と山村部の地域特性を踏まえ、暮らし機能や居住を拠点到コンパクトに集積し、各拠点間の連携を図るため、道路や公共交通に加え情報基盤などのネットワークを強化した「拠点連携型都市」としている。公共交通の中心であるバスは、道路交通の影響による遅延や、多客時の混雑等の課題がある。		
視察概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人口減少、超高齢社会への対応が叫ばれるようになる中、従前の渋滞対策や公共交通機関の確保。</li> <li>・新交通システム構想の目的に「持続的な都市発展の実現」まちづくりの基軸として位置づけられるようになっている。</li> <li>・次世代型路面電車を日本で導入するというのは前例がなく、日本初の構想となった。</li> <li>・導入ルートは2000年度にそれまで検討されてきた14ルートから6ルートに絞り込んだ。</li> <li>・地域の特性に応じて、鉄軌道、路線バス、コミュニティバス・乗り合いタクシーなど多様で階層的な交通システムを導入した。</li> </ul>		
評価とその理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>・さまざまな交通手段が連携する交通結節点（乗り継ぎ拠点）が豊田市として参考にできる。また、医療費削減効果の数値が示されくらし起点の発想で進められ地域に根付いている点。</li> <li>・30年前から戦略的に取り組んでライトレールが実現できたことで、沿線住民が増えた点。</li> <li>・公共交通の政策として、東武宇都宮線、JR宇都宮線が南北に通っていた。不足していた東西の路線をライトレールで補完しライトレールの布設により、工業団地の誘致、宅地開発など組み合わせている点。</li> <li>・家庭ごみの焼却や家庭用太陽光などにより発電された地域由来の再生可能エネルギー100%で走行するゼロカーボントランスポートを実現している点。</li> </ul>		
本市に反映できること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人手不足などで、バス路線を増やせない状況の中、渋滞解消や、地域拠点を作り定住を進めていくには、一つの仕法だと考える。</li> <li>・豊田市の南部地域には、基幹バスの路線の少ない地域には、この様な仕法は、効果的だと考えるが投資額が問題である地域核を中心としたまちづくりをしていく上では、必要な施策だと考える。</li> <li>・事業費確保の戦略について、豊田市は見習うべき点。</li> <li>・水素とバスレーンなどの組み合わせにより、豊田市でも公共交通の1つとして使える可能性がある。</li> </ul>		

その他  
(意見・課題などあれば)

・豊田市の場合、2交代制を敷いているトヨタ自動車関連企業は深夜の勤務交代を公共交通でまかなうには限界があり、渋滞の緩和や交通手段の転換の発想へはハードルが高いと感じた。  
・交通系ICカードを利用して乗車するライトレールで、料金を支払わずに乗車する行為への対策がカメラだけでは対策として物足りなく感じた。モラルの向上などへの取り組みも必要と感じた。

